

「ブリ(中)」 「幻」となった時代も

不漁の原因を探る

富山で獲れる大型のブリは、高級ブランド「氷見鰯(ぶり)」の名で全国的に知られている。

しかし、意外と知られていないのが1970年代から80年代にかけて不漁が続き、地元ではめったに獲れない「幻の魚」とされた時代があったという事実である。当時、日本海北部ではブリの漁獲量が低迷し、県内漁獲量がわずか0.8トンという年も記録されている。ところが90年ごろから、それまでの不漁がうそのようにブリが獲れ始め、県内で年間200～300トンが漁獲されるようになったのである。

日本海沿岸各地のブリの漁獲量を見ると、富山など日本海北部で不漁だったころは、山陰地方など日本海西部の定置網でブリが大量に漁獲された。逆に日本海北部で豊漁が続く現在は、日本海西部の定置網で不漁が続いている。

現段階の推測では、分布・回遊様式に何らかの変化が起こり、不漁だった当時には北部へ回遊しなかったブリが、再び回遊するようになったものと考えられる。

ブリの回遊については、3～6月にかけて主に九州西方の東シナ海で産卵後、日本海を夏から秋に北上。秋から冬には南下して、翌春、再び産卵するとされ、ある程度の状況は明らかにされていたが、富山で獲れるブリはいつ、どこを回遊しているのかなど、詳細については不明であった。

従って不漁や豊漁の要因も不明であったことから、県水産試験場は国や隣県の水産試験場と協力し、ブリの詳細な分布・回遊状況を明らかにし、その変動状況を探ることで、資源状態や豊漁・不漁の仕組みを明らかにする調査に取り組んでいる。

調査の方法は、自らの位置情報(緯度、経度)を毎日に計測し、最大7年間も記録し続ける、小型コンピュータを内蔵した機械をブリの体内に埋め込み、放流するものである。これまでの調査成果の概要については次回紹介する。
(井野慎吾)

